江戸後期の「藩儒の家」～股野玉川と龍野藩～

The Confucian Scholar Families in the Domains during Late Edo Period : *Matano Gyokusen* and the *Tatsuno* Domain

浅井 雅
Miyabi Asai

神戸大学大学院・日本学術振興会 特別研究員DC2
Ph.D. Candidate at Kobe University.
JSPS (Japan Society for the Promotion of Science)
Research Fellow (Two years scholarship)

近世の学問

読み書き　→　漢籍の素読

儒学

漢籍（*kanseki*）：和書に対応する用語であり、漢文で書かれた中国の書籍を指す言葉である。通常、仏典の類は含まず、儒教関連の図書を中心とした書物に限定して用いられる。

素読（*sodoku*）：古典の原文を幾度となく繰り返して読み，それを書物を用いないで誤りなく言うことができるようになる学習法の一つ。

近世日本における儒学

⇔ 中国 朝鮮

近世初期

~~武士~~ 上層庶民

18世紀

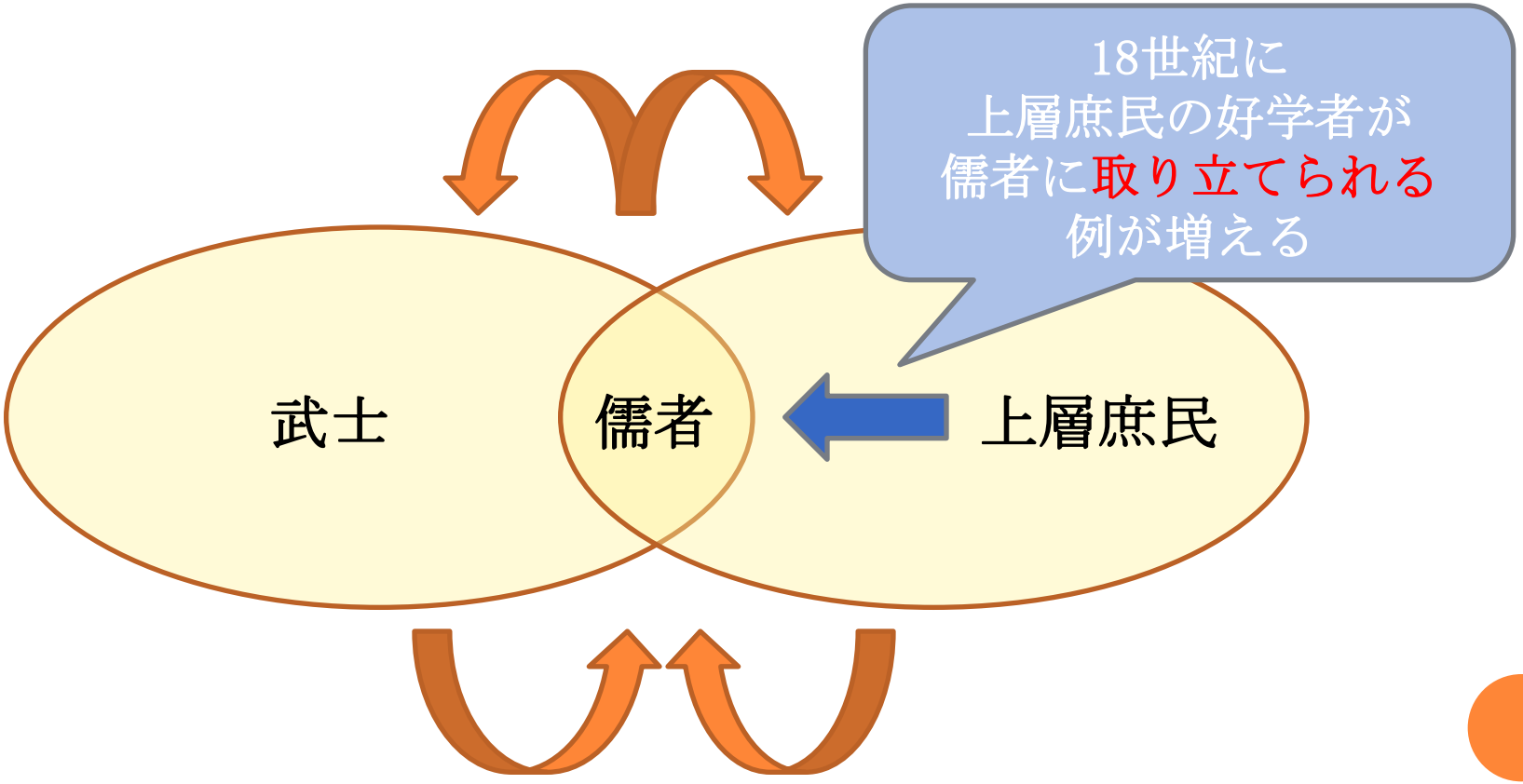
武家社会において
儒学とその担い手である儒者に一定の役割

元禄・享保期（17世紀末～18世紀前半）
：幕府や諸藩が儒者を召し抱える
宝暦・天明期（18世紀後半）
：諸藩において藩校（*Hankō*）を設立
→ 儒学により藩家臣団教化を行う政策が広く採られる
寛政期（18世紀末）
：幕府においても寛政異学の禁（*Kansei Igaku no Kin*）が政策化

幕府・諸藩の儒者

：学問･教育などを職掌とする武家社会の特殊技能者

＝　近世武家社会における学問や教育社会的あり方を具体的に明らかにするうえで重要な手がかり。



本報告の課題

① 〈藩儒の家〉（*Hanjyu no Ie*）の龍野藩における形成
② 藩儒股野玉川が龍野藩武家社会の内外で果たした役割
③ 玉川が龍野という城下町を中心として地域の中で果たした役割

また、〈藩儒の家〉の所蔵する資料の紹介

〈藩儒の家〉とは、宇野田尚哉が「儒者」（『身分的周縁と近世社会５ 知識と学問をになう人びと』、吉川弘文館、2007年、p. 21）の中で述べている概念で、諸藩で「18世紀後半以降、藩政改革の一環として儒学による家臣団教化を意図した政策（藩校の設立など）がとられていくのであるが、そのような政策の担い手としてしばしば新たに儒者が登用されており、その結果」その儒者の家が「以後廃藩まで続くことになる」家となることをいう。

龍野藩（*Tatsuno* Domain）

『脇坂淡路守』
（龍野市立歴史文化資料館発行、2007年）
による。

現在の兵庫県南西部たつの市付近。
寛文12（1672）に願譜代の脇坂氏が入封し、
以後 幕末まで5万石余を統治。
比較的早い時期から藩儒の登用。

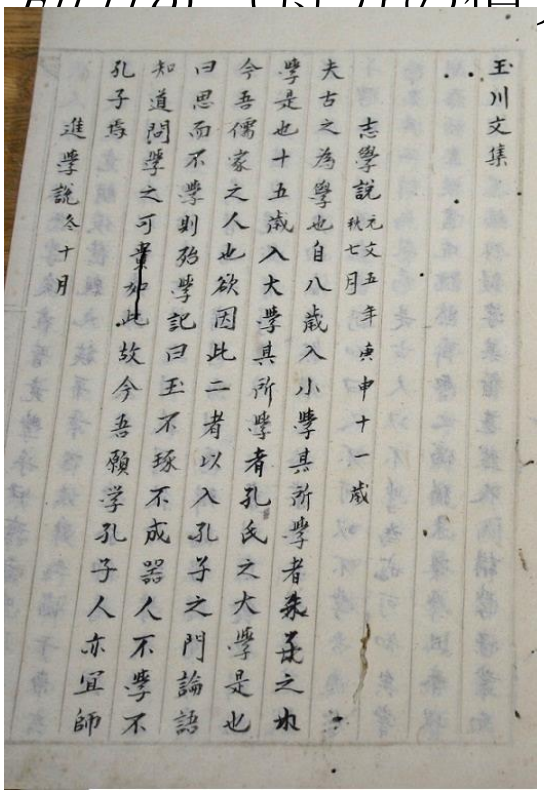
股野玉川（*Gyokusen Matano*）

股野玉川墓碑銘（たつの市龍野町片山小宅寺）、『諸氏略系』（たつの市立龍野歴史文化資料館蔵）、『国書人名辞典』（市古貞次ほか、岩波書店、1993～1999）による。

享保15（1730）年～文化3（1806）年。
龍野藩において、代々藩儒を務めた股野家の2代目。

- 玉川は、17歳の年から没する年までの60余年間にわたる日記（『日記』『内省日記』『幽蘭堂年譜抄』『幽蘭堂年譜』、延享3（1746）年～文化3（1806）年）とその他の関係史料を残しており、これは儒学・藩儒について研究する上で量的にも質的にも最も重要な史料群。

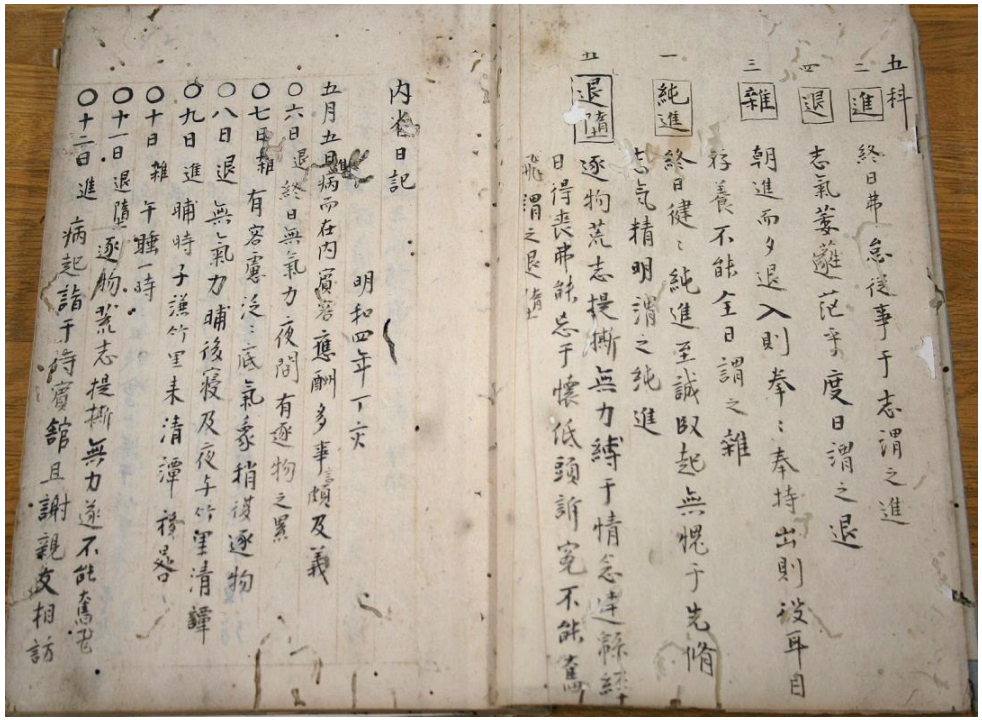
・父である股野龍渓（*Ryūkei Matano*）や父の同僚の藤江熊陽
（*Yūyō Fujie*）（母方の伯父）に学ぶ。11歳以後の詩文が現存する。


玉川文集
志學說 元文五年庚申十一歲 秋七月
夫古之為學也自八歲入小學其所學者灑掃之
學是也十五歲入大學其所學者孔氏之大學是也
今吾儒家之人也欲因此二者以入孔子之門論語
曰思而不學則殆學記曰玉不琢不成器人不學不
知道問學之可棄如此故今吾願學孔子人亦宜師
進學說 冬十月

『玉川文集』冒頭

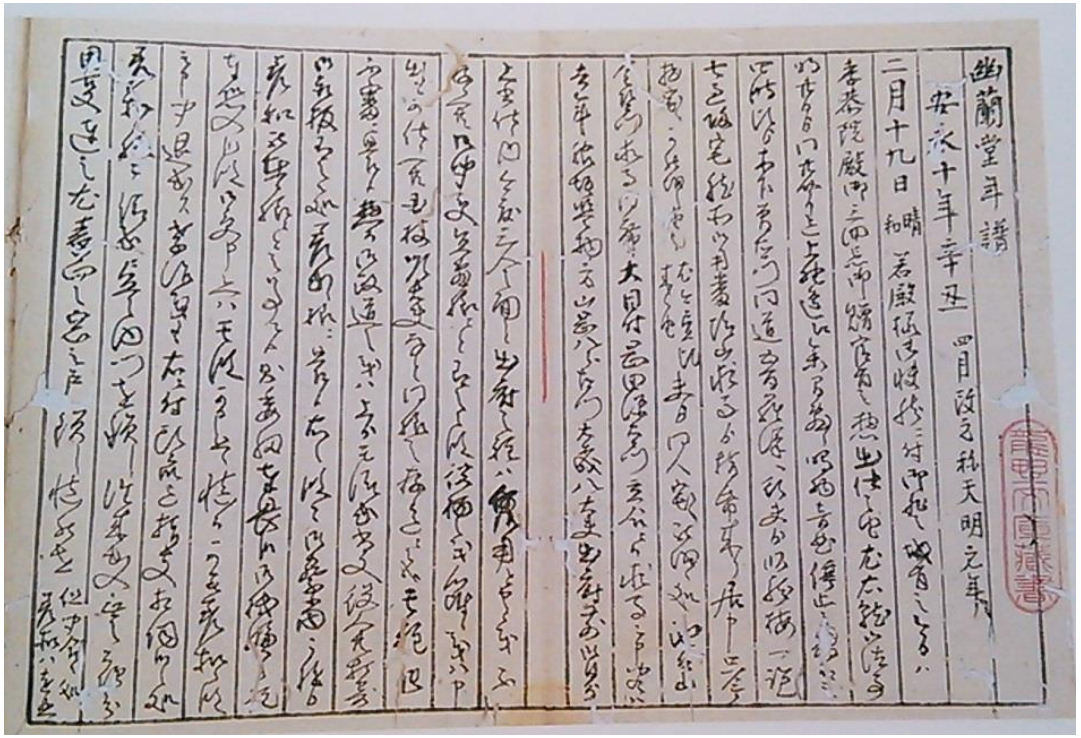
・延享2（1745）年、16歳で召し出される。
この時期の学業については『日記』（17～20歳）によって知ることができる。

- 20代前半、京都の古義堂(*Kogi-dō*)へ遊学。
  ← 藤江熊陽が古義堂に学んで以来、父・龍渓を初め、龍野から古義堂に学ぶ者が多かった。
- 宝暦5（1755）年、26歳で家督相続。以後、公務により龍野と江戸を行き来する。
- 40歳を過ぎて玉田黙翁(*Mokuō Tamada*)の虎渓精(Kokei-Shōja)に入門し、闇斎学を学ぶ。この時期の日記として『内省日記』（38～42歳）が現存。



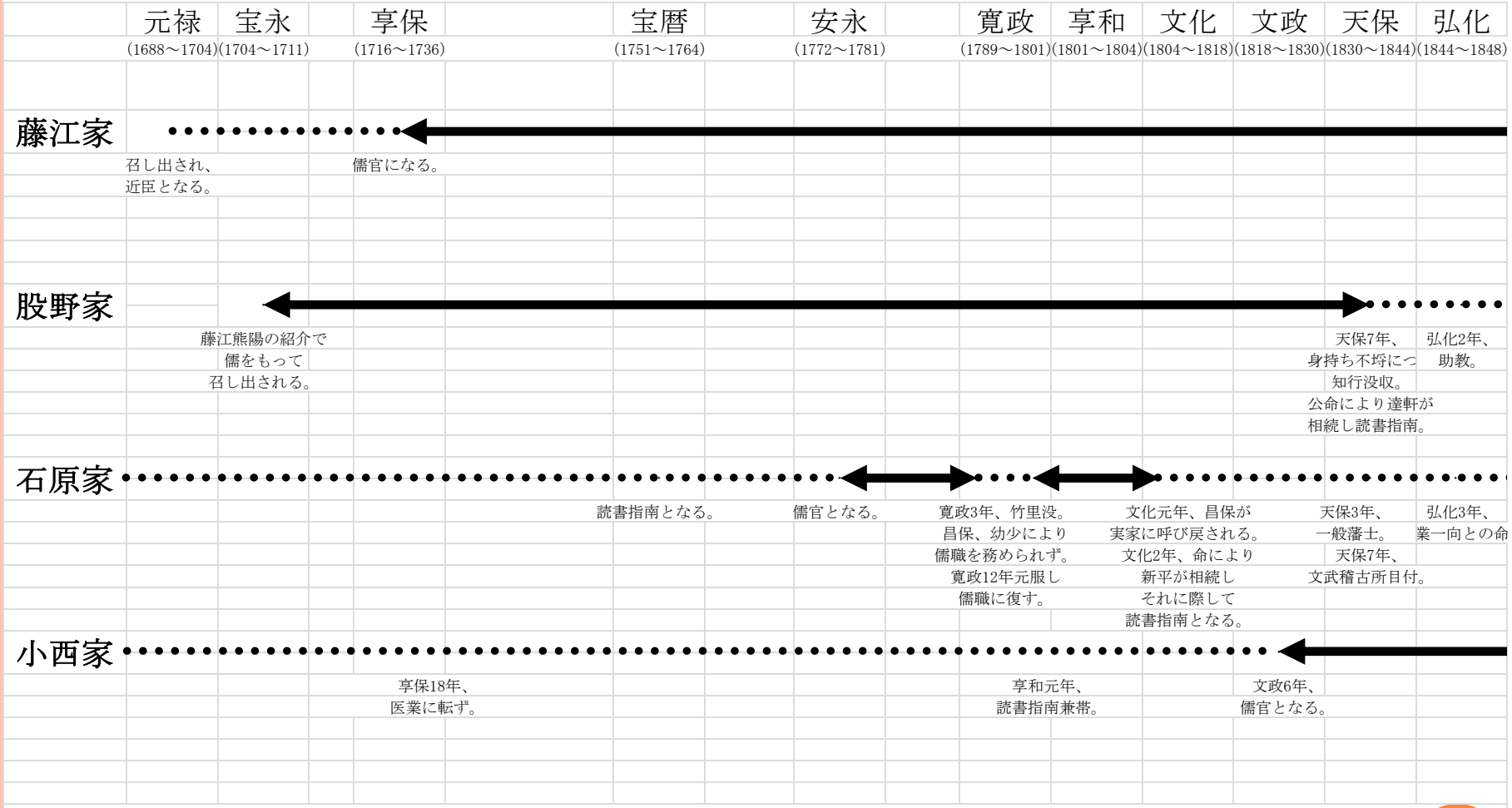
『内省日記』

- 江戸藩邸で世子・脇坂安董（*Yasutada Wakisaka*）の侍読を勤める。
- 安永2（1773）年から死まで（ただし、安永8年8月～安永10年2月は欠。）の日記として『幽蘭堂年譜』（*Yūrandō-Nenpu*）がある。



- 享和元（1801）年、隠居。

龍野藩における〈藩儒の家〉



注：この表は『諸氏略系』全7巻、『脇坂家無足諸士略系』全10巻により作成した。

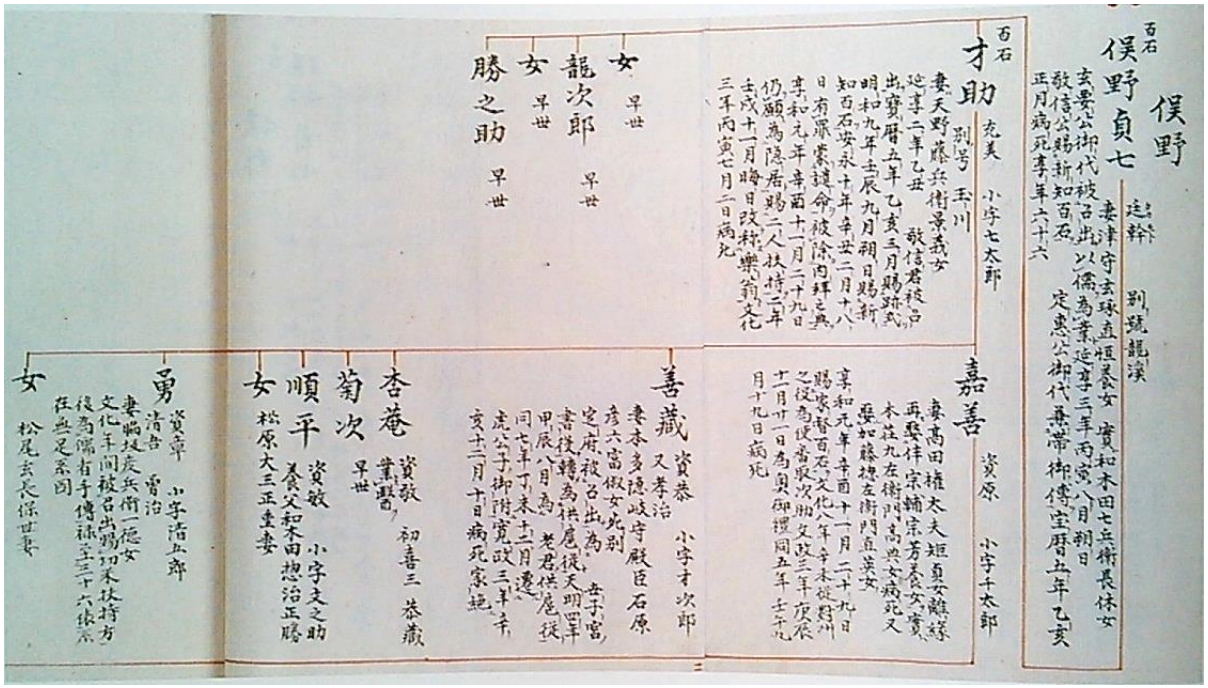
股野家の待遇と継承の過程

股野家	①	龍渓	100石	延享3（1746）年8月、新知100石。
	②	玉川	100石	龍渓の嫡子。 延享2（1745）年、脇坂家第6代・安興に召し出され、 宝暦5（1755）年、父の死により跡式を賜う。 明和9（1772）年、新知100石。 享和元（1801）年、願いにより隠居となる。
	③	順軒	100石	玉川の嫡子。 享和元（1801）年、父の隠居により家督100石を賜う。 文政5（1822）年、死去。
	④	遜	100石	順軒の嫡子。 文政5（1822）年、父の死により家督100石を賜う。 天保2（1831）年、死去。
	⑤	信	100石	実は順軒の次男。天保2（1831）年、家督100石を賜う。 天保7（1836）年、身持ち不埒により知行没収。
	⑥	達軒	60俵3人扶持	天保7（1836）年、文学を厚く志すにより藩主の命で股野家相続。60俵3人扶持。 天保8年（1837）、読書指南。 弘化（1845）2年、助教。

注：この表は『諸氏略系』全7巻、『脇坂家無足諸士略系』全10巻により作成した。

玉川の活動

『幽蘭堂年譜』の分析によると、
藩儒の公務とは、藩主の侍講、世子・庶子の教育のほか、
上級藩士の学問相手、一般藩士の成人教育、系譜編纂など。
さらに、股野家私邸で公開講釈が行われ、講釈場、
後の藩校的な役割を果たしていた。



『諸氏略系』
（股野家系図、
たつの市立
龍野歴史文化資料館蔵）

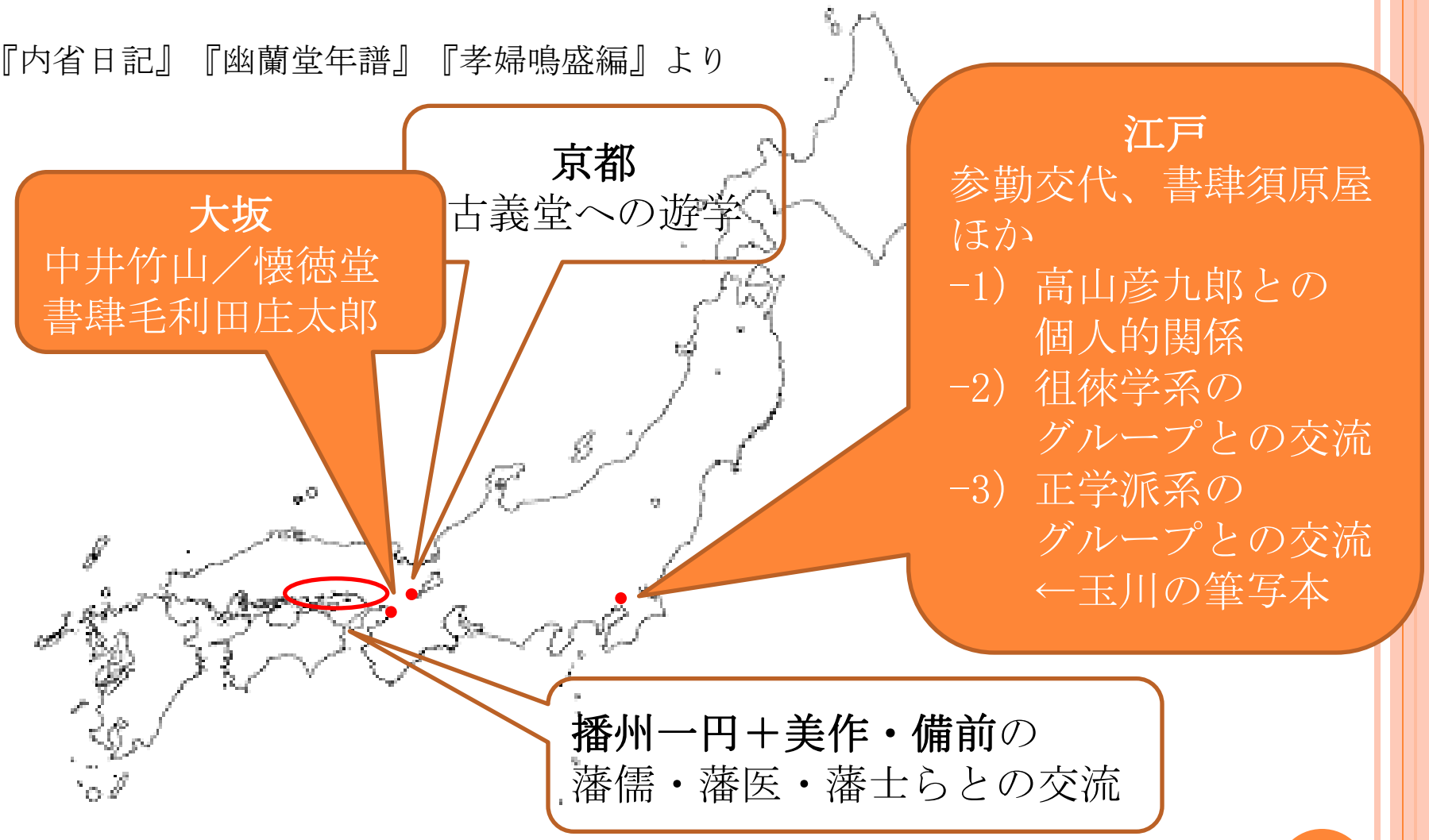
上級藩士との学問

時期	講 日 等	内容	テキスト	メンバー
明和5（1768）年～明和7（1770）年	4・9の午後	豫章公宅小学講	小学	不明
安永6（1777）年正月21日～安永8（1779）年8月8日	5･10の夜	貞観政要講	貞観政要	垣屋平馬（のち年寄400石） 脇坂貢（取次役のち年寄城代380石） 脇坂六郎（のち取次役200石）
安永8（1779）年4月17日～不明		貞観政要講	貞観政要	脇坂蔵人（のち家老1300石） 脇坂内記
天明元（1781）年10月3日～不明	1･6の午後	小学講	小学	大藤浪江（取次役300石） 脇坂六郎（のち取次役200石）
寛政3（1791）年正月13日～享和元（1801）年	3･8の夜 →2･7朝 →3･8の夜	内講	貞観政要 →小学 →近思録 →大学 →小学 →論語 →易経 →書経 →孔子家語	脇坂志馬（家老職見習のち家老1300石） 垣屋平馬（年寄400石） 脇坂貢（取次役のち年寄城代380石） 山岡亀右衛門（のち年寄役城代380石） 脇坂守衛（のち年寄370石） 山岡多仲（取次役のち年寄360石） 脇坂富八（のち番頭360石） 真鍋主鈴（番頭360石） 日永伊織（年寄350石） 池田外記（のち番頭350石） 真鍋兵庫（のち年寄330石） 山岡伊惣治（のち取次役兼軍使330石） 脇坂津守（のち番頭320石） 角田齢司（のち物頭270石） 溝江小膳（取次役兼帯軍使250石）など
寛政4（1792）年5月2日～不明	2･7の夜 →4･9の日	論語内講	論語	出渕衛士（年寄350石） 進藤勝馬（奉行のち年寄300石） 中村嘉藤太（のち年寄300石） 池島小藤太（取次役280石） 渡辺源之進 木下曽右衛門など
寛政7（1795）年正月20日～寛政12（1800）年4月	9の夜 →10の夜	会読	中庸→易経会読	進藤源助（取次役250石） 脇坂六郎（のち取次役200石）
寛政13（1801）年正月27日～11月	2･7の朝	大学会	大学	関覚兵衛（のち番頭350石） 加集勇蔵（のち年寄300石） 中村嘉藤太（のち年寄300石）など

職及び禄については『諸氏略系』全7巻、『脇坂家無足諸士略系』全10巻による

他藩・他地域の学者とのネットワーク

『内省日記』『幽蘭堂年譜』『孝婦鳴盛編』より



⇒ 地域的つながりにおいても、江戸でのつながりに
おいても学派横断的

城下・周辺諸地域の一般藩士・上層庶民との関係

・入門者：『幽蘭堂年譜』より

一般藩士子弟

：村尾庄吉（安永4（1775）年9月18日、江戸にて）
野勢惣兵衛（安永8年（1779）年4月19日）
田付一摩嫡子伝之助、11歳（寛政3（1791）年10月3日）
井村弥兵衛養子亀三郎（寛政4年（1792）4月18日、江戸にて）
大森忠治息政、85歳（寛政11（1799）年10月8日）など44人

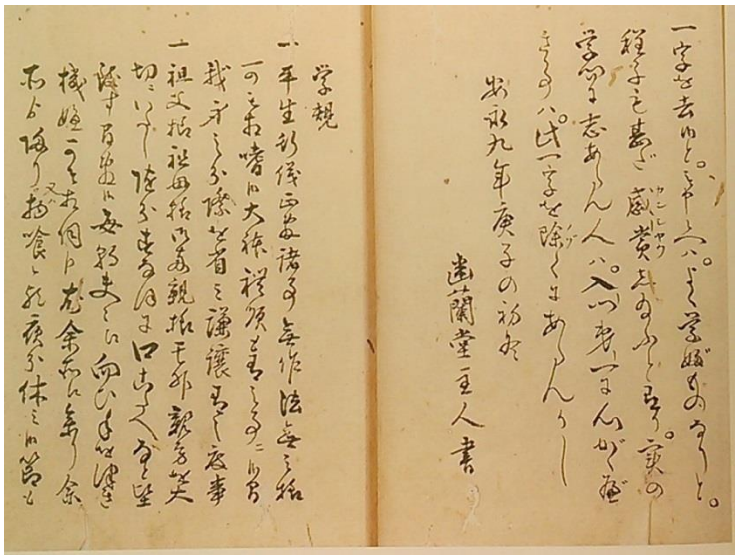
上層庶民子弟＋α

：佐用菊池正因悴嘉蔵（天明6（1786）年3月7日）
曽根村ノ庄官入江喜左衛門（寛政3（1791）年4月24日）
下町綿屋半次郎悴栄蔵（寛政5（1793）年10月5日）
亀山ノ医生高原三省之子丹治（寛政5（1793）年11月2日）
津保や利左衛門悴貞蔵、8歳（寛政7（1795）年7月23日）
辻川村大庄屋三木甚右衛門悴東作（寛政8（1796）年7月19日）
扇屋弥兵衛之悴鉄五郎（寛政11（1799）年4月晦日）
作州久世之郷士松岡林兵衛次男主膳、16歳
（享和元（1801）年9月16日）など35人

⇒ 龍野に於いても江戸に於いても入門生がおり、
年齢も階層も様々である。

『玉川先生入門規矩』
（たつの市立歴史文化資料館蔵）

『幽蘭堂入学垂戒』
（たつの市立歴史文化資料館蔵）



『幽蘭堂入学垂戒』②
（たつの市立歴史文化資料館蔵）

・講学活動・文化的な営みへの参加

・・・内講：

【史料】『幽蘭堂年譜』

寛政12(1800)年2月17日／夜輪講会初、天野貞之進・本間金仙勤講、其外岡久之助・進藤林之助・万屋左右助・種屋銀次郎・横田正吉・わた屋元右衛門・相生屋善之助等来ル

寛政12(1800)年8月26日／朝後古文内講如例、堂本屋次郎吉初而出席

⇒ 内講や輪講への上層庶民の参加が伺われる。

・・・詩会ほか：⇒謳、70歳の賀会・冬至の詩会など

【史料】『幽蘭堂年譜』

寛政3(1791)年3月13日／軍治・貞蔵・嘉善同道、兼約ニ而円尾屋四郎五郎方へ同道行、満田庸庵・大塚順碩・竹内要貞、相伴ニハ主人・悴・政右衛門・菊屋三之助など小鼓、太鼓打、円尾屋太郎右衛門、同　吉淀屋なと謳ニ而高砂・芦刈、自然居士半囃子いたし候而及五更而立出還家

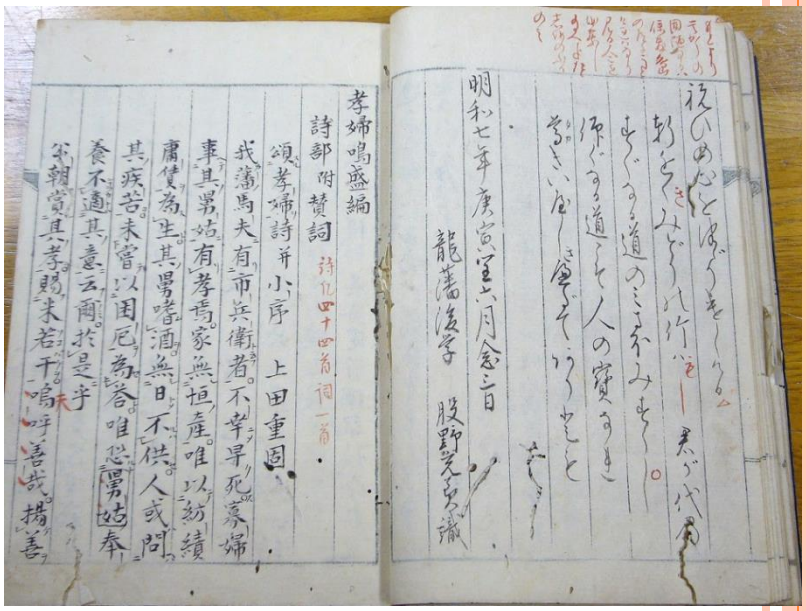
【史料】『幽蘭堂年譜』

寛政11(1799)年4月11日／

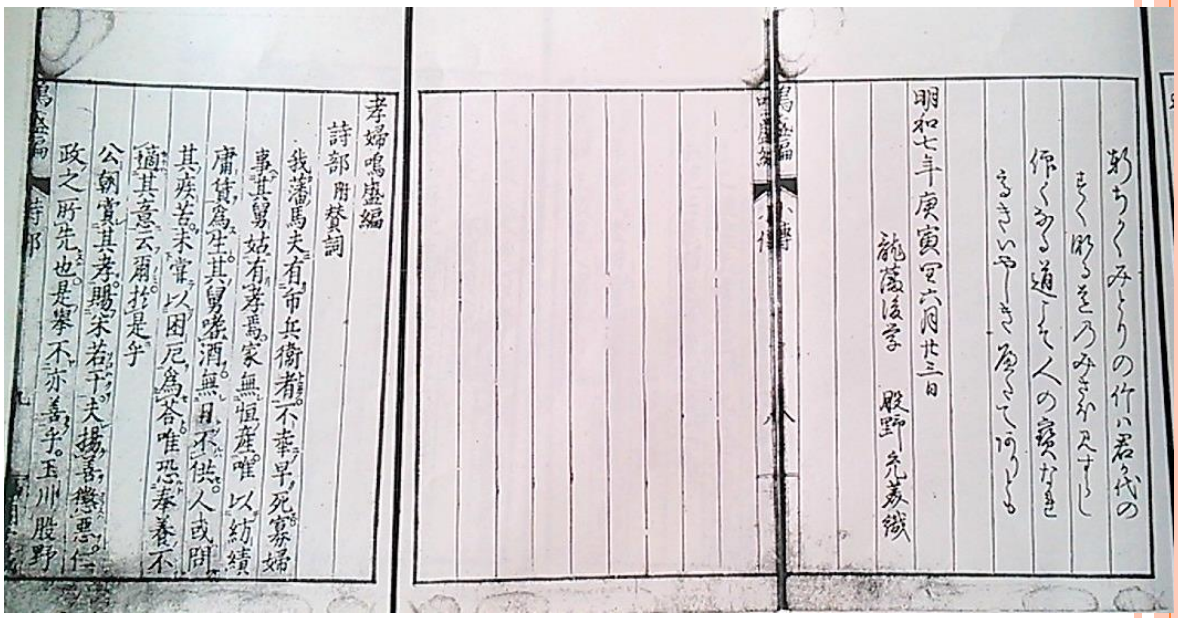
今年余七十之賀群子聚リ候而設賀筵、夕飯後ヨリ客来案内ニ而七ツ前頃皆々見来、其人ハ天野八郎左衛門父子・船越慶太・三沢清太夫、同政七・松尾玄長・本間亮仙・井村幾門・伴宗助・藤江松太郎・加藤千太郎見来、同女中客井村氏お政との・同五郎助・船越氏おさよとの少女両人・本庄清左衛門両人・松尾氏方両人・松原家両人・三沢氏方両人。伴宗輔方両人・和木田のお勢賀・為之助、右ニ付取持之分和木田順平・工屋読之助・小西純道・松久浅治・米田屋俊助・種屋銀次郎・馬屋忠蔵・河原町金蔵・のり屋市兵衛・大道村善左衛門・伴蔵妻おせき、其外さよ・津馬・千代・きよ相招ク、料理人ハ八百屋万助来ル、扨狂言舞催し俊助・銀次郎・読之助なと取持、俄ニ袋屋岩蔵申遣し来ル、右之外案内候而不参之方ハ武藤与一左衛門父子・井村五郎右衛門妻・水谷武左衛門妻・加藤惣左衛門妻・武藤氏家内差合候而不見、其外菊池劉平・本屋左吉・赤穂屋平次・土地川三六不来、四更過客散ス

・・・『孝婦鳴盛編』
(“the *Kōfumeiseihen*”)

『孝婦鳴盛編』
(狩野文庫本)



『孝婦鳴盛編』
(たつの市立龍野歴史文化資料館蔵)



『孝婦鳴盛編』
(狩野文庫本)

孝婦鳴盛編中の人物関係

龍野藩士及びその親族	65	10歳の玉川二男、13歳の藩儒の子ら10代の者、83歳の医者、藤江熊陽の娘ら女性も含む
龍野城下町人など	21	
龍野藩領農民など	9	平野邑、網干人、宿邑、千本邑など
赤穂藩士	3	赤松滄洲嗣・蘭室、赤穂侍医など
姫路藩士及び姫路藩領の町人・農民など	24	姫路学士含む
その他の龍野周辺領民	5	出合邑（但東国養父郡出合村か？当時、天領）、宍粟神戸杉田邑（当時、安志藩領）の者
不明	2	
計	129	

孝子（*Kōshi*）：父母によく仕える子供のこと。
儒教において孝は最も重要視された徳目の1つであり、中国では古代より顕彰の対象とされた。
日本でも儒教の影響を受けて、律令法に孝子を顕彰する規定が定められたが、どこまで実施・運用されていたか不明な側面もある。しかし、18世紀になると、いわゆる「孝子伝」という文学ジャンルが多く編纂・出版される。

まとめ

- 〈藩儒の家〉については、龍野藩においては宝永年間以降100石クラスの〈藩儒の家〉が２つ、その他 安永年間以降、補助的な家が確認できた。
- 股野玉川は〈藩儒の家〉の後継者に生まれたことにより、文事の担い手として、
  …上級藩士→政治的なやり取りまで
  …学問を通じた他藩・他地域の学者との関係
  → 学派横断的
  …龍野城下とその周辺で講学活動を通じた濃密な人間関係を生み出している。
  その関係＝身分横断的
  → 中下級藩士・上層庶民：つなぐ役割

『孝婦鳴盛編』